

これは世界一の苦力である。何か大仕事があつて多数の苦力を必要とすれば、苦力頭に旨を傳へると彼は支配下の苦力を召集し、立地に二三百名を集める、印度で人夫を集めるにはこれが第一の方法である。

彼等は朝より夕まで晝食一回を取るだけでよく働らく、支那人もこれには往生するほどである。この苦力は世襲的職業となつてゐて子々孫々相傳へ、苦力の外に職業はなく向上心を育むこともできない。幼少から親に倣つて苦力の積古をなし、四五歳にもなると頭へ載せるトクリ(籠)をもつてベザールを迂路つき、客があればその荷を請うて頭へ載せる。一丁も持運べば三錢なり五錢なり、たとへ少許でも勞賃がもらへるのである。

十歳前後には殆んど一人前となり、客の荷物を引つたくるやうにして苦力役を果す。だから學校へは行かず悉く無學文盲である。お前達は子供にまで苦力を倣はせずとも、學校へ出したらどうだといへば、例へ學問を習はせても誰も相手にしてはくれない、苦力の子は矢張り苦力になる外ないのだと諦め切つてゐる。そして十五になり二十になり、大人になれば農耕でも沖仲士でもその體力を發揮する分野が開けてくるのである。

苦力の勞賃は一日一留比半から二留比であつて、ビルマに出稼ぎして三年も働らけば相當の貯蓄ができる。出稼人の半數は妻帯者、半數は獨身であるが、獨身者は所得の半分を食費に充て、

残る半分は毎月必ず國元へ送金する。送金は必ず郵便爲替により、爲替料は金額の一分だから英政府の収入も馬鹿にできぬが、苦力自身の貯蓄も月々に確實に嵩んで行く。苦力頭(ミステリ)も殆んど世襲的職業であつて、彼等は一般苦力の如く全然無學では勤まらない。算數も英語も少しは必要であるから子弟も學校へ通はせてゐる。

耕作労働者は多くココナダから出る。そこには苦力運輸専門の會社もできてゐるが、單に船と

コレンゲ種の小兒の苦力



水とを供給するだけだから、會社の利益は年々莫大の額に上る、デツキ・パツセンジャアの苦力は船中で自炊し、砂魚、ポイルライス、オコシなどを食つて數日は平氣で我慢する。彼等はまた酒を嗜み、ターデーと稱する濁酒のやうなものを、四合瓶一本八錢(日本貨十錢)位で買ひ求め常にこれを楽しんでゐる。

印度苦力はその階級別により慣習により、かく組織立つてゐるから、欲すれば一時に何百人でも間に合ふが、ビルマ人にはこの組織なく支那人にも見られない。ところでビルマ人はもとより支那人も一生苦力で満足することなく、一日も早くこの境涯の脱出を望んでゐる。ビルマ人などは苦力でゐながら苦力と呼ばれることを恥づる風があり、自然労働にも身が入らないが、印度苦力になると、生れる時から苦力を以て運命づけられ、それを自分の使命と觀念してゐるから、肉體も精神も全く苦力に出来上つてゐて、勞役を恥づるどころかむしろ進んで職場に汗を流す。したがつて能率が上り、ビルマ人や支那人に比して一層雇傭者に喜ばれ重寶がられるのである。だが、彼等にしても死ぬまで勞役を希ふわけではない。出稼ぎして毎月國元へ送金するのも、これを以て土地を買入れ地主となることが最後の理想であつて、「國へ歸れば私は何もしない」境涯が、彼等中心の希望であり喜びでもある。

第四回 教徒

印度國內において、ヒンヅー教徒に次いで多數を占める宗派は回教徒である、彼等は自治州の外、自ら王侯としてヒンヅー教の領民を支配するものもあれば、ヒンヅー王の下に領民としての治に服するものもあり、すべて七八千萬と算へられる。

回教徒は一日五回の禮拜を行ふ習慣となつてゐるが、實際には多く朝夕二回である。教徒は顔や手足を洗ひ口をそよぎ、朝は日出に向ひ夕は西方メツカに向つて禮拜し、靜かにコーランの一節を口中で暗誦する。殊に金曜日には何事を措いても業を休み、回教寺院に行つて禮拜を行ふのであるが、商人などで終日參拜の不可能なものは、午後の一二時間を禮拜に費し、歸つて店を開けるものもある。

彼等が聖地メツカの參拜を終生の目的とすることは、他國の回教徒と變らぬけれども、その熱意は本國居住者よりむしろ海外移住者に盛んである。彼等は平常海老色のトルコ帽を被つてゐるが、メツカ參拜を終つて歸つたものは白色の帽子を被る權利を許され、教徒の仲間からも尊重される。もつともこれは男子に限られてゐて、室内に幽閉され人間の數にも入れられぬ女子には許されぬ。

回教徒は多く商工業に従事して農業は營まない。商業はその種類の如何を問はず、いやしくも儲かりさへすれば何にでも手を出すことを憚らない。工業は製造業、織物業、メリヤス業を經營しましたその従業員となる。そして夙に起き夜に寝ね、定時には業に就き午睡は正午から二時間と定めるなど、その生活慣習はほぼビルマ人と同じだけれども、ビルマ人に比して一層嚴格に勵行する。異るところはビルマ人が自宅の來訪者を歓迎するに反し、彼等はこれを好まず、常にオフ

イスを用ひて居宅は休息の場所とすることである。

商人としての彼等の活動ぶりが、いかに機敏であり大膽であり、時としていかに不信義であり無恥であるかは、すでにビルマの章で詳述したからこゝでは省く。ベンガル及びアッサムの二州には殊に回教徒が多く、チッタゴンの回教徒は多くの下級船員を供給してゐる。印度の船員は大抵これであつて、サンバンも艀船も、その漕手はすべて彼等の間から出てゐる。

回教徒はおそろしく紅茶が好きである。客にも侑めるがお手の物のリプトン茶を、日本のやうに内輪に注がず、器物に溢れるほど熱い茶を汲んで出す。オフィスで客に會へば必ず茶か粥かを選びしめ、マドラスでは粥が名物だけれども、他は大抵茶をえらぶ。家庭へ人を招くことは滅多にないが、たま／＼招待する場合があつても、客は男子に限り女子は招かない。宗教に無關係な外人などは回教徒の夫婦を招くことがあつても、彼等が外人を招待する場合は矢張り男子だけである。もし相手が多人数の場合は自宅に招かず、旗亭でティーパーティーを開く。ビルマ總督は毎年一回ティーパーティーを開いて國內の有力者を招待する例であつたが、回教徒はいつも男子だけしか出席しなかつた。

回教徒とビルマ人との混血兒はゼリバリと呼ばれ、回教徒の中でも最下級に置かれてゐた。彼等の有願者はともかく、貧者は雑役や掃除など一般人の好まない勞役を強ひられ、女子は行商を

して家計を助けてゐた。

第五 兩教徒の反目

印度の二大宗派であり、人口の殆んど全部を占めるヒンヅー教徒と回教徒とは、その教理なら生活慣習なら、雪と炭ほど違つて少しも融和しない。ガンヂーなどはこの兩教徒の融和を見なければ、印度の自治も獨立も無意味であるとして、兩者の融合を畢生の祈願とし、極力その親和の策を講じたけれども、未だにその甲斐なく反目を續けてゐる。

ヒンヅー寺院の騒々しさは話の外である。鉦や太鼓でドンチャン騒ぎをなし、普通の家でも數人集まればこれを初め、近所の迷惑は一通りでなく月夜には殊に甚だしい。禮拜だけでなく享樂にもこの鉦、太鼓を昇ぎ出し、歌聲も興味が湧き來れば急調となり奏樂もこれに伴ひ、夢中になつて囃し立てる、その騒々しさは我國の日蓮宗の比ではない。私はビルマにおいてあまりのうるさゝに堪へず、場所の變更を要求したことが度々であつた。祭禮には山車を曳出して市中を練り廻り、信者は例の鉦、太鼓で囃し歩く。

回教徒の禮拜は對蹠的にこれと相反する。彼等の寺院には鉦もなく太鼓もなく、身を淨める水の用意を外にして一物を存しない。朝夕嚴肅冷靜に祈禱を行ひ、コーランの一節を誦するも口の

中で音を立てない。だから、回教徒はヒンヅー教徒の騒々しさを蛇蝎の如く厭ひ悪魔のやうに悪む。彼等は平常不淨物として豚を忌むけれども好んで牛羊を食し、バクリ(羊)祭には羊を殺し血の滴れるのを犠として祀る。そのとき印度本土はもちろんビルマでも牛羊の頭をヒンヅー寺院に投込み、大騒動の起ることがある。政府ではこの不祥事を未然に防ぐため、バクリ祭には全市に戒嚴令を布いたと同様、五六間の間隔で巡査に立番させ、萬一の變に備へるほどであつた。

ヒンヅー教徒にいはせると、回教徒は印度の侵略者であつて印度人には仇敵である、何としても回教徒と一緒にいられぬといふ。數年前のことである、日本の總領事が汽車旅行中、偶然同じ一等車に印度人二人と乗り合せた。一等車に乗るほどの印度人だから相當身分あるものであつたらうが、彼等はいつか議論を初め、次第に熱狂して果ては腕力沙汰にも及びかねない形勢となつた。總領事氏は見ても見ぬふりもできず、仲裁に入つて、

「君等は同じ印度人ではないか、そんなに昂奮して議論せずとも、落付いておだやかに話したらどうか？」

といふと、彼等は擬乎と氏を見てゐたが、口を揃へて、

「貴下は日本人か、それなら我々の争ひにタッチするより兄弟國の支那と戦争を止めるがよい。我々はヒンヅーと回教徒で仇同志だ、その争ひに貴下は發言の權利がない。」

と逆襲され、口の開きやうがなかつたといふ話であつた。それほど彼等の敵對感情は深刻である、相當身分あるものでも仇同志だといふ、無智蒙昧の一般大衆がヒンヅーはヒンヅー、回教は回教と各自奉ずるところに執着し、指導者階級が融和を勧める聲に耳を傾けないのは是非もなし。

第六 寡婦問題と回教婦人

ヒンヅーにはやかましい寡婦問題がある。もし夫が死亡すれば妻は亭主を殺したものととして輕蔑され、同族からもマーマヤとして扱はれ、食事を共にすることも許されず、殆んど死ねよがしの待遇に甘んじつゝ、生涯悲惨な生活を送らねばならない。昔は殉死者を出したこともあつたが、今では法令を以て殉死は嚴禁されてゐる。

さうした悲惨な境涯に沈淪する寡婦は、では孰れも老婦人のみかといふと、中にはもちろん老婦人もあるがそれのみではない。一たん嫁してその夫に死別すれば、いかに若い婦人でも寡婦として同じ境涯に入らなければならぬ。美人でも再嫁は許されず、寡婦生活の悲惨に忍従できぬものは、家庭を出て町の女にでもなるより外生きる道がない。そこには更に他の罪惡と肺疾や梅毒や恐るべき病癩が手を續けて待つてゐる。

もつと悪いことは、寡婦の刻印を押されるものは、すでに同棲生活に入つたものだけでなく、單に婚約をしたばかりでも、相手が死ねば同じ寡婦生活に入らねばならぬことである。だから、印度では五歳以下といふいたい氣な幼女の寡婦が相當數に上るのであるが、これらの幼年寡婦は一度も生の光を仰がず、闇から闇への呪はれた生活に泣かねばならぬ。寡婦問題が印度における重大な社會問題として、近時やかましく論議される所以であるが、慣習の久しき、未だに根本的の解決を見るに至らない。

この寡婦問題は當然に印度人の婚期問題に導く。早熟は熱帯住民の特性であつて、早きは二三歳で親と親とが婚約を結ぶものもあるが、それらは生活に懸念のない富有階級に限られてゐる。それも實現は十二三歳にならねば行はれず、多くの結婚は十六七歳以上である。下層階級になると妻子を扶養する資力がないから、早婚の弊などは論外の沙汰であつて、労働者には却つて獨身者が多く、彼等は結婚を以て人生唯一の目的となし、日々の努力を續けてゐるのである。

これを要するに印度人の婚期問題は、その人の生活力の有無並に強弱に歸着する。四姓を通じて有産者は早期に相手を決めて婚約を結び、年頃になるを待つて實現を見ることが出来るけれども、その力なき貧者は婚約も結婚もできない。最下級者でも有産者には少年少女の婚約を見るに反し、上流階級でも貧者は長く獨身を忍ばなければならぬ。

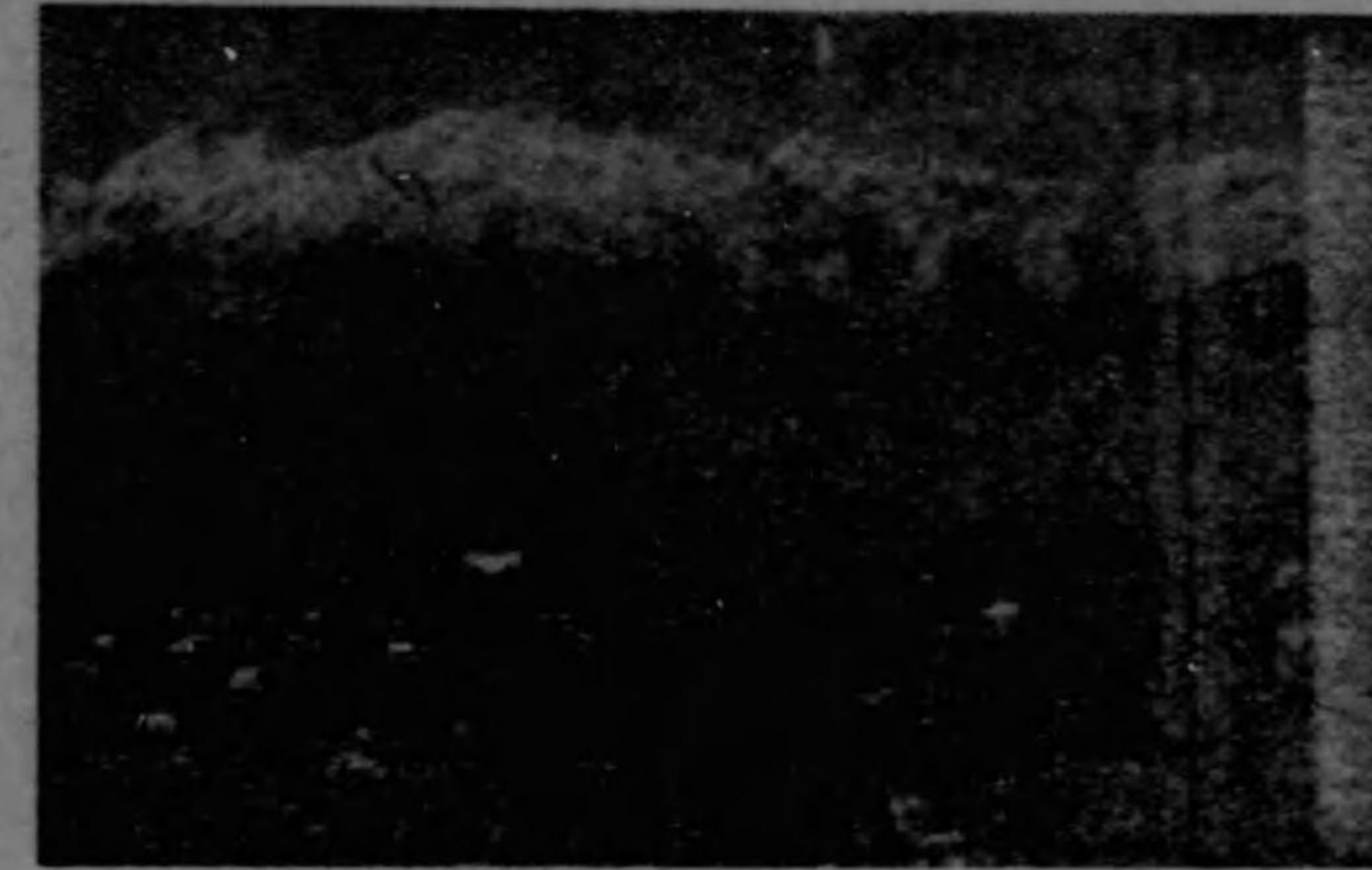
ヒンヅーに寡婦問題があると同様に、回教徒には一般の婦人問題がある。彼等は婦人の他人と接觸するを嫌忌し、外出には頭巾を被らせ、汽車も婦人室があつて一般乗客と區別してゐる。家庭にあつても主人か女の召使の外は姿を見せず、全く幽閉状態にあることは昔の支那婦人の纏足と趣を等しくし、拘束は是れむしろ彼よりも嚴重である。これがため回教徒の女にはしばしば健康を傷ひ病氣に襲はれるものが尠くない。

彼等はまた一夫多妻の慣習を有し、それも多ければ多いほどその地位を誇揚する道具となる。結婚披露は最初の妻を娶れる際のみに行はれるが、それにも男子は男客だけ、女子は女友達だけを招待し、男女相招きて喜びを願つことをしない。私はしばしば回教徒の結婚披露會に招待を受けたが、一度でも妻女を伴つた男子を見たことがない。もつとも回教徒は慣習として公然一夫多妻を實行するが、ヒンヅー教徒は慣習でこそなけれ、有福者が事實において蓄妾を楽しむことは回教徒と敢て變りがないのである。

第七 ダーヅリン旅行

私が二度目に印度を旅行したのは大正七年であつた。ダーヅリンに行つたのもこの時でヒマラヤ見物のためであつた。カルカッタから夜行に乗ると翌朝早く麓の驛へ着く。こゝから登山鐵道

に乗換へ八時間でダージリン市へ着くのであるが、夜行だと汽罐車の先に篝を焚き番人が付いてゐる。何故そんなことをするかと聞けば、夜間は猛獣が出没するからその襲來を警戒するためだと判つた。



望遠山ヲラマヒ

途中に食事を攝る驛が一ヶ所あつた。汽車は迂餘曲折して登り、山の中腹にかゝると謂ゆるダージリン茶園がある。こゝはリプトン茶の最上品を産出する地方として天下に知られてゐる。ダージリン市に着いてホテルに休息の後、夜中三時にホテルを立出で、乗馬してタイガーヒルを目指し、約四時間半を費してヒルに着いた。キンチンデエンカ峰の空を蔽ふ大岩壁には白雪が降り積り、それに朝日の映する光景は雄大とも何とも形容を絶してゐた。眞白の雪は旭光を受けて薄紫に匂ひ、しかも中天にかゝる神祕な姿は、畫家も描寫を忘れ筆を投じて感嘆する外ないといはれる。私は幸にこの神祕な光景を眺めることのできたが、不運な人は折角こゝまできても、雲に遮られてこの雄大な景色を眼にすることのできぬものもある。そこから同じやうに雪を被つたエヴエレスト連山も眺められる。

恰も一月の二十日であつた。夜中雷を伴つて驟雨が襲ひ來るかと思れば、忽ちにして白雪霏々として飛んでくる。頭上に雷がはためいて眞直ぐに落ちてくるのは雨、水蒸汽がヒマラヤに突當れば瞬時に白雪と姿を變へて地上にかへる。夏と冬とが一時に來るともいふべく、氣温の激變がさうした自然界の不思議を見せるのである。

ダージリンから一步境を越えれば祕密境ネパール王國であり、市民にもネパール人(グルカ)が多い。國境には數ヶ所に關所を設けて英國人の哨兵が監視してゐる。旅行者は一々身體検査を受け、いやしくも不審と睨まれたが最後、文句なしに追返される。また西藏入りの本街道があり、西藏の隊商は定期的にこゝにきて交易に従事する。

印度旅行の煩はしさは、何處へ行つてもボーイや苦力に付纏はれることである。私は印度語を解しボーイの必要はないのだが、ホテルに着くとすぐ部屋ボーイの必要の有無を聞かれる。要らぬと答へれば「なぜ要らぬか、部屋ボーイを使はぬ人はゼントルマンではありませんよ」といふさて、宿泊の契約を取極めると、店員はドアを開けてボーイが苦力を呼ぶ。聲に應じて苦力が馳せ來り奪ふやうに荷物を運び去れば、それで五錢か十錢のチップにありつくのである。

彼等はどんな物でも客の所有物を持てばチップの權利を得たと考へる。一步でも持運べばこれまたチップの權利を占めたと考へる。その要求に應じなければゼントルマンではないとして輕侮

の眼を向けるのである。だから旅行者は常に小銭を洋袴に用意し、時に應じて支拂はなければならぬ。その煩はしさを詰ると一貫下は大旦那でせう、私は雇人です。錢を貰ふに不思議がありませんか？」と毫も恠まうとはしない。

しかし物は考へようである、煩はしいところに便宜もある。印度の汽車は廣軌で寢臺を取れば席も廣い、大都會にはバスもある、すべてはボーイ任せで金さへ使へば指一本動かさず、大旦那で快適な旅行ができる。ホテルは普通一泊十二圓、食事は晝が二圓、夕は三圓と思へばよい。萬事印度人式の旅行を忍べば極めて低廉に済むが、それでは何處へ行つても紳士として待遇されない。印度人で二等以上に乗車するものは餘程の身分でなければならず、大抵は三等を選び更に特三の客車もあつて貧者の便に備へてゐる。

大都會には立派なホテルがあつて、旅行者は毫も不便を感じないが、村落になるとその設備がない。しかしそこには市設のダーク・ベンガローがあつて、コックもありボーイもあり、旅行者の使用に任せて簡易なホテルの役割を果してゐる。

第八 東西の二大都會

東はベンガル灣に接するカルカッタ、西はアラビヤ海に臨むボンベイ、この二市は印度におけ

る東西の二大都會であると同時に輸出入の繁榮する二大商港でもある。

カルカッタはガンジス河の支流フイグリの河口から七十哩の上流にあり、港としては理想的ではないが印度第一の商港で、對岸のハラウを合せて人口百五十萬、大英帝國でもロンドンに次ぐ第二位の大都會である。初代總督ヘスチング以來、印度政廳の所在地であつたが、一九一二年政廳はデリーに移されてしまつた。しかもカルカッタは文化と商業において依然印度の首都たる地位を失はない。その博物館、圖書館、植物園、動物園等は専門家にとつても貴重な資料が集められてをり、印度第一を誇り得るが、英人の建てた町だけに古代文化の遺跡はない。

カルカッタにはヒンヅーが多い。近代都市を誇るだけに表通りは立派であるが、一步横町に入れば道路狹隘にして牝牛が到るところに迂路つき、塵芥散在して足の踏場もなく、その汚穢さは言語道斷である。しかもヒンヅーは牝牛を神聖視してその爲すに任せ少しも行動を束縛しない。牝牛がユラリ／＼と漫步するに會へば、自動車も止まつてそ、通過を待たなければならぬ。牝牛は馬鹿大名のやうに人間を尻目につけ、大道を我物にしてあくまでも泰然と歩を運ぶのである。

前年マンダレーでもこれに閉口し、ヒンヅー教會をして市から五六哩離れた地に牧場を設け、牝牛はすべてこゝに收容せしめたことがある。その飼育費は牛乳の賣却代を充當し不足は教會をして支辨せしめた。印度にはこの牝牛がどこの都會にもそ／＼あるいてゐて、食物を與へなけ

れば何時間でも店頭に蹲居して御輿を擧げない。ヒンヅの勞役に使用する役牛は牡牛に限り、牝牛は乳を絞るだけであるが、肉用に供される場合はすべて回教徒の手に處分される。

昔はカルカッタの夜は奇異の風景を展開したものであつた。市の真中の賣笑婦の巢窟があり、夕景馬車を驅つて行くと町の女達は「ゼントルマン」と呼びかけて車中に乗込み來り、直接談判で巢窟に拉し去られる。先づ三鞭酒を抜き二十留比で約束はきまるのだが、結局五六十留比を散財することになる。これを拒絶するには金がないとして逃げる外に道がない。無恥無職の町の女も商賣がさうさせるのであつて、金のない男に用事はないからである。弊の甚しきに至り當局も見かねてその後ケタツポーケ所に集合せしめられた。英國の軍隊と開港場には賣笑婦はつき物と相場がきまつてゐた。

開港場といへば、ビルマ邊では船が港に入ると、酒場に駈けつけるのは英國人、賭博場にもぐりこむのは支那人、女郎屋を第一に目指すのは〇〇人として、各國人の氣質を分類し評價してゐた。

ボンベイは約四十哩に亘る同州海岸地帯に見る唯一の大都會で、またカルカッタに次ぐ印度第二の貿易港である。背後に廣大な棉花地帯を控へ、紡績工業で印度をリードしてゐる。この地はパーシー族の本據であつて一般に教育もあり風俗もよい、ビルマに在るものは大抵官衙に職を奉

じてゐる。輸出物はカルカッタのジュートと並んで棉花取引が旺盛であり、パーシー族の大商人が多い。なほボンベイには有名なタジマホールの名を冠したタジマホテルがあり、建築と設備の優秀を以て聞えてゐる。

第九 愍れな「大地の子」

印度人の約九割は農村に住み、八割は純粹の農民である。その地は廣く人は多いから印度は世界で一・二を争ふ農産國だといつてもよい。主なる農産物の世界産額における地位を覗いて見ても、黄麻は殆んど印度獨占であるし、甘蔗糖、落花生は第一位。米、棉花、棉實、茶種、胡麻、茶、蓖麻子は第二位、葉煙草、亞麻仁は第三位、小麥は第四位、大麥は第五位を占めてゐるのである。

右のうち米は耕作面積三千萬ヘクタール、日本の本州、九州、四國を合せた面積に等しく、全耕地の三五%を占め、一九三七年度における收穫高は二千六百七十三萬噸に達してゐた。それは第一位の支那に迫り、第三位の日本をすつと引離してゐる。

甘蔗は稻と同じく印度の原産と見られ、古代からその産物の一であつたが、近年一時ジャワ糖に壓迫され年々莫大の輸入を餘儀なくされた。しかし一九三二年以後保護政策の採用によつて復

活し、五年ならずして再び世界第一の地位を取戻した。この糖業はガンヂス河の中流域を主産地とする。

棉花は米國に次ぎ世界第二位を占め、少くとも一、二百年前までは世界の主たる棉産地であり世界最良の綿布産地であつた。主なる栽培地はボンベイ背後の黒土地帯で、一九三七年の收穫高は五百六十六萬俵に上り、その大半は國內で消費し、自餘の一半は戦前日本へ輸出されてゐた。最も廉價な粗剛纖維として知られる黄麻は殆んど印度の獨占到屬し、「卸賣の包装紙」と呼ばれ棉花、コーヒー、穀類等の囊、または軍専用の土囊類に缺くことのできぬ資材である。これはまたマニラ麻と異り粗い織物にも利用することができるし、栽培地は米作にも變換できる融通性がある。

茶は世界市場への商品としては、一八五〇年まで支那の獨占となつてゐたが、今では印度とセイロンがその半ばを占めてゐる。世界一の雨量を記録するアッサム地方の丘陵傾斜面は、見る限り茶で蔽はれてゐるが、これは英人が印度農業に貢献した唯一の作物といつてよい。かつ勞銀も極度に廉いから茶園經營には理想郷である。そして茶は印度人によつて消費されず、唯一の純商品作物に屬し、専ら英本國に向つて輸出され、すでに英人にとつては不可欠の飲料となつた。

その他、小麥と大麥とはパンジャブ、聯合州の二州が全産額の七割を占め、稗類、玉蜀黍、豆

類は米に次ぐ栽培面積を持ち、太古から印度の重要作物であつた藍は化學染料の出現によつて壓倒されたが、それでも栽培地數萬エーカーを存し、煙草も殆んど支那に匹敵する産額を有し世界で二三位を争つてゐる。果實もドリアン、マンゴー、バナナ等南洋に産するものは悉く産出する外、北部の産地では優良な杏、林檎、オレンジもできる。採油用種子類の胡麻、菜種、亞麻仁、蓖麻子、棉實、落花生等は大半を國內で費消し、自餘は主として歐洲に輸出されてゐた。

以上のやうな多種類の世界的重要農作物を産出し、九割の國民を土地に生かす印度人は、正に地上の農産國民であり、文字通り「大地の子」でなければならぬ。しかるにこの大地の子は大英國統治の下、農業も農民も、共に明らかに年々行詰りの窮境に陥り、識者の間に幾多の論議が持上つてゐる。

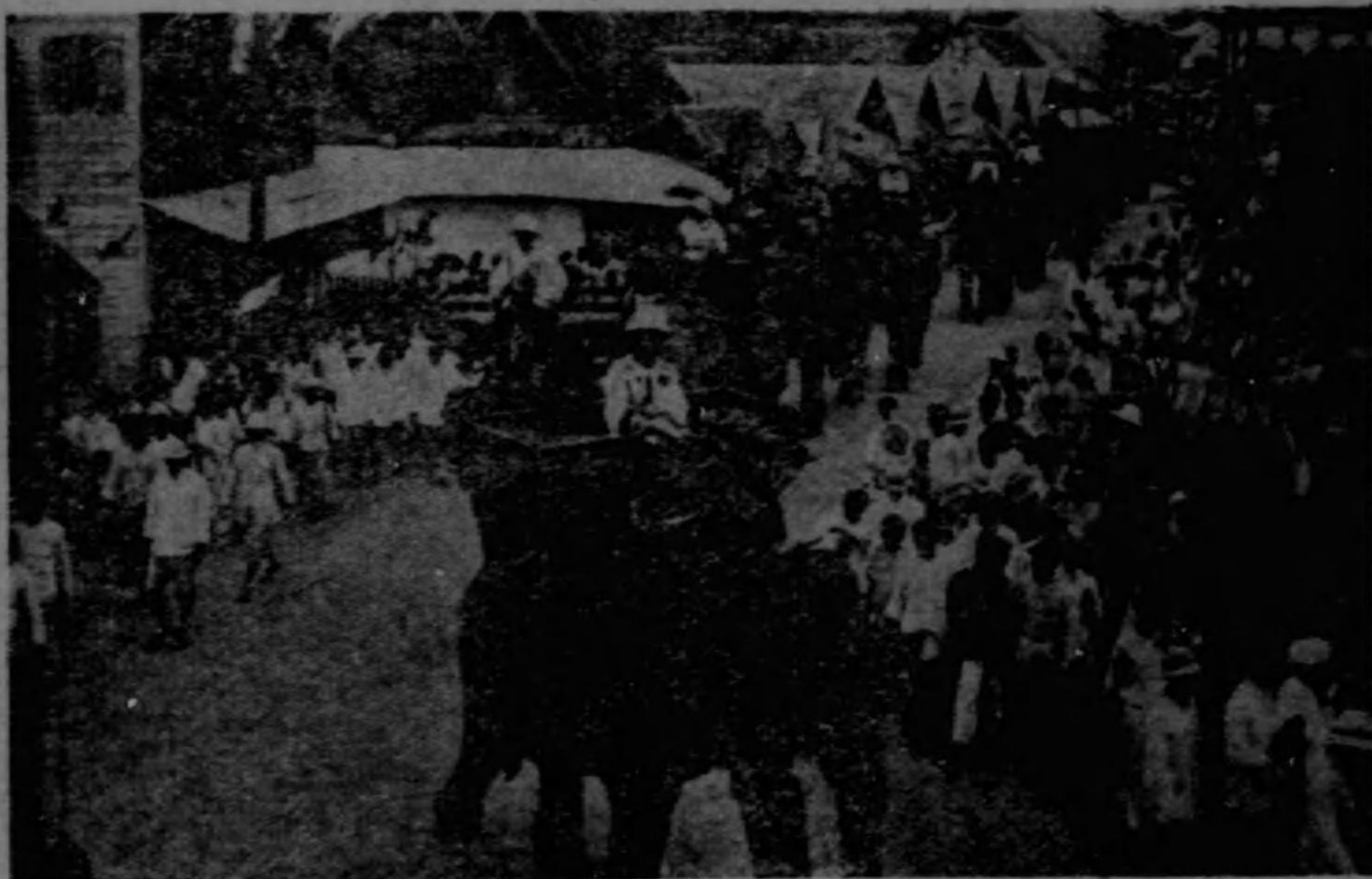
問題の中心は、何といつても飢餓線上に追ひつめられた農民の窮迫である。全農民の三分の一は自ら土地を所有せず、純然たる日傭労働者であつて、しかもその勞賃は一日六アンナ（二十四錢）内外に過ぎず、月收僅かに三留比半（約四圓五十錢）とも推計される。一英人官吏が「印度農民の半數以上は、三度の食事を腹一杯食つた時の心持がどんなものか知らない」といつたのは正論敵より出づるものであつて、印度人の平均年齢が二十二、三歳に止まるのも、一九〇〇年の世界的感冒で千三百萬人の死者を生じたのも、この貧窮に基く平素の營養不良に原因することは

争はれない。

その責任の一半は印度人自體にあるとしても、他の一半が支配者たる英人の搾取政策にあることは否定できない。飢饉は印度名物の一つであるが、ある調査によれば十七世紀までの飢饉は概して地方的であつたに反し、英國の治下に入つた十八世紀の後半からは、著るしく廣範圍にかつ頻繁に起るやうになつたといはれる。英政府が直接統治者となつてからは、流石に東印度會社時代のやうに搾取も露骨な悪辣さを示さず、殊に二十世紀に入つてからは比較的活潑な救済が行はれ、餓死者こそ減少したが根本的解決には殆んど何の努力も拂はれず、農民の窮乏と負債は増す一方で飢饉は慢性化するに至つた。

もう一つ彼等を窮乏に陥れた原因は、印度における農民各戸の耕地面積が著しく零細なことがある。全印度の農家一戸平均耕地は五エーカーを出でず、したがつて収穫率を高めねばならぬにかゝはらず、彼等は殆んど肥料を施さないで地力の枯渇に委し、品種の改良や栽培法の改善を好まず、殺生禁から虫害等も放任して世界最古の農業國が、最も不良の収穫率に停滯してゐる。

日本は一戸平均耕地一町一反で印度の半分に過ぎないが、勤勉な日本農民は養蠶、漁業、林業などで相當の収入を擧げてゐるばかりでなく、農産収穫率でも著しい成績を収めてゐる。その一例を示せば一陌當り收穫が米は日本の三八キントルに對し印度一二キントル、小麦は日本の一七



列行の象度印

キントルに對し、印度七キントルで、日本農民は印度のそれに比し二倍半乃至三倍の収穫率を擧げてゐる。この一事だけでも印度農民の窮乏は當然だといはねばならない。

さうした印度農民耕地の零細化は、支那と同じく卑族への均分相續法が一因をなしてゐるが、それは當然に農村人口の過剰を意味してゐる。しかるにこの過剰人口を吸収すべき新工業は興らず、新耕地は開拓されず、海外移民も國內移民も甚だしく窮屈であるため、農村人口緩和の道なく、印度人は窒息状態に生きねばならないのである。

更に農民の窮乏に拍車を加へたのは、貨幣經濟の浸蝕であつた。これがため印度特有の村落共同體は、その自給自足の經濟も相互扶

助の慣習も、共に完全にその實質を破壊されたが、保守的な印度農民は時勢と共に移ることを知らず、依然として空しき形骸に縋りつき、弊害だけを存して自由な轉換を行はなかつたため、いよ／＼動きのとれぬ窮地に陥つたのである。これはしかし無學無知の農民だけにその罪を歸することはできない。むしろこの一大轉換期に際し、農民を指導し啓沃し萬全の善處法を講ずべき地位にあつた、支配者たる英人が大部分の責を負はなければならぬ。

もちろん英政府といへども、手を束ねて悠然農民の窮迫を傍觀してゐた譯ではない。灌漑施設を行つた、産業組合制度も作つた。しかし灌漑施設によつて浮び上つた土地は、廣汎な印度國內の耕地總面積に比すれば、殆んど九牛の一毛に過ぎないし、産業組合制度も形式に過ぎず、官僚的指導の下では手続きが面倒で金利は高く、しかもその取扱ひは冷酷を極めてゐた。農民はむしろ取引の簡易な高利貸の門に走り、負債は歳ごとに山積して行く。抜本塞源の農村救済法、したがつて全印度救済の方策に關しては一も誠意ある施設が實行されてゐない。

かうして大地の子——三億に近い印度農民は、豚小舎のやうな家に住み、三度の食も満足には食へず、光を失つた運命の下に、果しなき苦難の道を辿るほかなき、悲しむべき大地の子なのである。

第十 生活百態

印度人の生活といつても、そこにはヒンヅーがある、回教徒がある、パーシー教徒がある、宗教を異にする外、自治州に生を営むものもあれば土侯の支配下に屬するもあり、異なつた政治組織の下に生きてゐる。それらの生活を一々詳記することは、本書の如き小冊子では紙幅が許さなからぬ。こゝには思ひつくまゝその片鱗を叙して、一般の状態はこれを讀者の想察に任せることとする。

チャルカ 手紡車はガンヂーの提唱によつて復活された、印度古來の家内工業である。ガンヂーは道場においても牢獄においても、一定時間チャルカを廻すことを日課とし、彼の追隨者も無數に生じてゐるが、元來印度棉花は纖維が太くて機械紡績でも二十番手以下を紡ぐ外ない。殊にチャルカの紡糸を使つた織布は重く熱く印度人の趣好に適しない。したがつて棉花の消費高も大した量には達しないが、これに反して近代的纖維工業は目覺ましい發達を見せてゐる。綿紡織を第一とし毛織物も絹布もできて、殆んど英本國を凌駕せんとしてゐる。最初は英獨の技師が指導に當つてゐたが、今では印度人自らこれに任じて差支ないやうになつた。現大戰後は全く英國の支配を脱し、先づ綿紡織から獨立を實現するかも知れない。

土地制度 印度の土地には公有地と私有地とがある。公有地はリースランドといひ、九十九ヶ年の期限で租借することができる。私有地はフリーランドといひ、賣買は自由である。その地價も一エーカー三、四十留比の安値だから、出稼者も永年働らけば相當の地所持になれるわけである。ビルマに出稼ぎする労働者はこれを最後の念願として、食ふものも食はずに努力を續けてゐる。

遺産相続 卑族への均分相続は印度の一般法であるが、一夫多妻の回教徒の死んだ場合は、その遺産に對して多勢の子供は男も女も相続権があり、長男、次男、三男と次第に分前が低下し、女は最少に甘んぜねばならぬ。妻は子のない場合は自ら直接相続するが、子供があれば相続権は子にあつて、妻は母として後見役の地位に止まる。死者が生存中遺言して豫め死後の遺産處分を決定して置くこともできるが、争議は遺書の認定に生じ裁判所に持出して骨肉相争ふことも珍らしくない。

ビルマの有福回教徒は、大抵無一文から身を起したものであるが、息子は馬鹿者が何故か多い私の家主は曾てペルシャの領事を勤め、名譽裁判官でもあつたし、政府事業も請負つて多數の家作を有し五六年の間に百萬長者になつてゐた。至極の善人であつたが死後に男兒三人、女兒二人あり、それ／＼遺産を分配したところ、男子の中には正妻のほか獨婦人と同棲するものあり、婦

人は子供を連れて毎日自動車を乗廻し、豪奢王侯を凌いで人の目を聳てしめてゐたが、瞬く間に産を盡して姿を消してしまつた。他の男子も同様の不始末を仕出かし、女子の分前にまで手をつけたが、何をして物にならず、數年の間に一切を煙にしてしまつた。

敬老の風 ヒンヅーの労働者は概ね瘦せかけてゐるけれども、富有者は榮養物を攝り遊んでゐるからむしろ脂肪ぎつてゐる。彼等は智力才腕があつても少年を尊ばず 敬老の風があつて白髪または禿頭に及び、腹の突出てゐる人をもつとも敬ふ。日本ならば重役タイプとでもいふべき風事の老人を大旦那(バラサブ)として尊び、白髪、禿頭いづれも可なれど同じくは禿頭を好むしとする。ところが労働者は白髪を嫌ひ髪を染める、「そんなにまでしなくとも善いではないか」といへば、イヤ、白髪でゐると仕事を止めさせられる、いま止めさせられては家族が困る、なほ數年は働らかねばならぬといつて、白髪頭を黒々と染めてゐる。

産婦小舎 産婦には本宅の外に産所を設け産月にこゝへ移らしめる。産後も二週間ほどは産所に止まらしめるを例とするが、女兒を嫌ふこと甚だしく、男兒を生まなければ喜ばないのは支那と同じである。自然女兒のみを生む女はその位置が下り、女兒多き家へは人も寄りつかない。これに反して男兒多き家へは人も好んで行き、その幸福にあやからうとする。ひとりパーシー族は男女平等で甲乙を設けず、男女いづれが生れても家庭は翻らぬのである。このパーシー族ならばと

もかく、女子を卑しむヒンヅーに女子教育論のやかましいのはいささか矛盾を感じられる。なほマドラスの既婚婦人は朱を以て額に印をつけその表彰とするから、一目してそれと知られる。

血族結婚 下級船員を供給するので有名なチッタゴンの回教徒は、こゝのみに集合してゐるため自然血族結婚に陥り、その弊は身體に現はれて驚くほど片輪者が多い。手足に六本の指があるものはザラに見るところだし、現に私は身體の接着してゐる双生兒を見た。同性の双生兒であつたが、日常生活の不便はいふばかりもない。二人同時に辨じ得る用事はともかく、別々の行爲にも一人は必らずお相伴しなければならぬ。一方が便通を催せば他方も同行を餘儀なくされるといふ風である。このほか種々の不具者はこの地、この種族に多く、少し誇張すれば恐るべき血族結婚の弊の展覽場といつてもよい。

歐化印度人 大部分がヒンヅーか回教徒である印度人の中に、南部マドラス人は早く白人活動の本據となつたため、クリスチャンに改宗したものが多く、歐化インディアンといはれてゐる。したがつて改宗者はもとより、同じヒンヅーでも女子に對する態度は中北部の如く嚴酷ではない同地における女子教育は發達して大學まで設けられてゐるが、かうした傾向は全印度を通じてマドラス人と國民會議派の知識階級に限られてゐる。歐化インディアンと對蹠的立場にあるはパンジャブ人であつて、回教徒は頭に六尺の白布を巻き、女は鼻柱か鼻翼に穴を開けて金の輪を箝め



景風の街人スラドマ

耳環の飾りもする。兵士と巡查は主にパンジャブ人から採用されるが、それは一見豪壯雄偉な體格と風采からであつて、彼等は多く六尺豊かの堂々たる偉男子であり、生來かつて剃刀と櫛を用ひず、鬚髯蓬々として相手を威壓するに充分の面構へをしてゐる。身長六呎で月給何留比を基準とし、何時増す毎に何アンナ増すといつた風で報酬が決定される。なほシーク族は昔から武士だと誇つて、男子は劍をぶら下げてゐる。

葬式異風 ヒンヅーの葬式は火葬であつて回教徒は土葬を慣習とする。マドラスでは死者を白布に包み茶毘に附するを例とするが、女子は生前使用した衣服を着せ、髪飾りを施し、眼に銀環を箝め、生けるが如く盛装して火葬場に送り、茶毘に附する際は悉くこれを取去り、白布だけにして火葬する。ボンベイを本據とするパーシー族は拜火教の一團であるが、

往時ペルシャから移住して来た種族であつて、その葬式は世界に類なく、死者の遺骸を「沈黙の塔」に送り、群る禿鷹の御馳走に供する奇習が行はれる。

淨と不淨 印度人はよく水を使ふ人種である。便所には眞鍮の器物に水を入れて行き、用便後左手を以て局所を洗滌する。近頃はチューブを以て水を誘導する設備のあるところもある。この習慣は痔疾の發病を救ふ效ある如く、印度人に痔疾の少いのはこれがためだといはれる。日本人の中にも印度人にならひ、用便後紙を用ひ更に水にて洗滌するものもある。また印度人が上下を通じて手洗の習俗あるは支那人と同じである。公式の會合では上流人は流石に遠慮するけれども、私生活においては誰に遠慮もなくこれを行ふ、日本人から見れば不潔堪へ難きも、彼等には彼等の理屈がある。男女の別なく檳榔子を噛む習慣はビルマ人と變りがない。

大道藝人 コブラ使いといふものがある、この大道藝人は瓢箪笛といふ笛を吹き拍子を取ると籠の中のコブラは十分位で浮かれ出し、鎌首を擡げてこれに聞き惚れる風情を見せる。コブラ使いはその頭を打つたりしてコブラにいろ／＼の恰好を作らせる。やがて一曲終れば見物から金を集めるとその何割か金を投ずる、こゝを終れば他の場所に移り、かくて甲から乙へと經めぐつて生活の資を得るのである。大道藝人はこの外にも手品師がかなり多い。

賊と乞食 泥坊には回教徒が斷然多い。殊にマドラスの一支族であるチヨリヤに多い。それと

いふのは彼等が鏡前直しを職業とし、平常多數の合鍵を所持してゐて、どんな鏡前でも雑作なく開けることができるからである。このチヨリヤが賊を働らくのは職業の故ばかりでなく、性頗る悍猛で動もすれば喧嘩をする。相手に向つてスワ・アカ・バチャ（豚の子）といふ最下等の惡罵

を浴せ、それでも降

参せぬ場合には突然

前をまくつて自己の

男根を露出するので

ある。かうなると相

手が敗となり顔を背

けて退却するが、申

には殴り合を初める

こともある。印度の

乞食にもいろ／＼種



印度人のコブラ使い

類がある。ヒンヅーの乞食は物を與へても受けず必らず金を望む、金を貰つて勝手に資材を買入れ料理して食ふためである。回教徒の乞食はヒンヅーのやうに物選みをなさず、金も物も喜んで

牧める。

燃料の牛糞 ヒンヅーは牝牛をひどく尊重するが、その牛糞は薪炭の缺乏する彼等にとつて大切な燃料を供給する。その製法は牛糞を多量に纏め、先づ兩手を以てタドンのやうに丸め、更に平べつたく押し擴めて、壁へでも何にでも貼付けて乾燥するのである。焚けば草のやうな臭を發するが左までの悪臭ではない、これが彼等にとつて唯一の燃料となるのである。

第十一 起てよ印度

以上に略述したやうなのが印度人である。英國に領有されてから生活はますます窮迫に落込みかつて華やかなりし文化の精神は失はれ、徒にその形骸にすがりつきつつ、没落國民として呻きながら闇黒の道を歩くのが印度人の現状である。さうした滅亡の一步手前に追ひ詰められた人民の先登に立ち、國民軍を編成してその總帥となり、敢然武力討英を叫んで祖國の門前に迫つたのが、こんどのチャンドラ・ボースである。

印度の自治獲得運動は久しい問題である。一九一八年ローラツト彈壓法が發布され、アムリツアーにおける一大虐殺を以て、前大戰當時における印度人の忠誠に報いた英の不信暴戾に憤激しガンヂーは従來の贊英態度を一擲して國民運動の陣頭に立つた。爾來彼の指導下にあつた國民會

議派は、ある時は回教徒と聯盟し、ある時は離反しつゝ、運動を繼續し、一九二九年に至つて自治獲得の旗幟を完全獨立に染め替へ、英國政府に肉薄して日支事變前に及んだ。

支那事變前二年の第一回日印會商は、印綿を買ひ綿布を賣ることを目的とした。印度でもこれを歓迎し生産棉花の捌口として絶好の市場を得たことを喜んだ。その後印度には纖維工業が勃興し日本に待つことが漸次衰へてきたところ支那事變起り、英國の歪曲的宣傳が印度民衆を誤り、日本は侵略國なりとの悪印象を全國民に植ゑつけた。もはや日本は頼み難し、綿花はすでに國內で消費し盡される、例へ若干の餘剩があつてもこれを蓄へ置けば可なりとして一時民心が日本を去つた。これが音頭取りを勤めたのはガンヂー、タゴール、ネール等の指導者であつて、大東亞戰開始後、日本は印度獨立運動援助の用意ある旨を聲を大にして宣明しても、何等反響の見るべきものがなかつたのはこれがために外ならなかつた。

一方、英國政府は印度國內における獨立要求の熾烈化と、東亞狀勢の不安に鑑みて自治問題に讓歩を裝ひ、その条件の一つとして現在の自治州と土侯國の融和聯盟といふ、できぬ相談を持ちかけた。周知のごとく印度には英領の外、五百餘の大小の土侯國がある。彼等は獨立問題とは無關係であつて、その國に外交權や軍事權はないが、もし自治州と聯盟して獨立問題を決すれば、現在の國內的地位すらも失はねばならぬ懸念がある。そこで我等は昔から獨立國である、今さら

何の獨立問題ぞといった風で極めて冷靜な態度を示してゐた。

それに國內の印回兩教徒はガンヂーやネールの必死の努力にもかゝらず融和の道を見出し難く、印度回教聯盟總裁のジンナーは斷乎として無差別獨立に反對し、ヒンヅーはヒンヅー、回教徒は回教徒として別々の獨立を要求し、印度分割を固執して譲らなかつた。これに對しヒンヅーマハサバは回教徒を敵視して居常これが監視の眼を放たず、カーク、サー黨はこれらの圈外に卓立してナチズムを模し、英勢力の掃蕩はもちろん會議派をも排撃してゐる。その間には英政府無條件支持の少數派も介在し、紛如として歸一するところがなかつた。

印度の最大政黨國民會議派内において、ネールはガンヂーの直系であり、師父としてガンヂーを尊び、その衣鉢の繼承者と見做されてゐた。ガンヂーに對しては印度人は彼を神人視し、ただガンヂーとは呼ばず マハトマ・ガンヂーと呼稱して尊崇措かない。彼がビルマ訪問の際は自動車に立つて演説するに、幾千の印度人は跪座してこれを聞く、その光景はまことに驚くべきものであつた。彼の生活は印度教の聖典そのままであり、國民も彼に倣へといふも追隨することができぬ。ガンヂーの聲望の隆々たる所以であつて、印度大衆の無條件に彼に従ふはこれがためである。政府もその取扱ひに困惑し、ハンガー・ストライキの際などは、萬一彼をして死に至らしめばどんなことが起るかも知れぬと恐れ、百方手を盡して生命を取止め釋放して安堵する風であつた。

た。そのガンヂーもネールも、一九四二年四月八日反英運動開始の宣言と同時に、果然彈壓の手が下り牢獄の人となつた。

現地にあつて日夜かかる状態を見聞し、運動の推移を注視してゐた印度及びビルマの在留邦人は、印度國民の獨立要求の熾烈さを知ると共に、その實現の容易ならざること危ぶんでゐた。第一に印回兩教徒の相容れざる宗教的反目、第二に印度教内の階級制度、第三に土侯國の無關心、第四に有力な指導者は悉く下獄して運動に中心を缺くこと、これらの四つは獨立運動に禍ひする痛として、むしろその不成功を豫言するに傾いてゐた。殊に三寸以上の兇器携帯を許されず、一挺の銃劍なく一個の彈丸もない彼等にして、近代的裝備を有する軍隊に護衛される英政府の打倒をやである。

しかし時局は急轉した。形勢は刻々にうつる。日露戦役において弱小日本が強大ロシアを撃破して全亞細亞人のために氣を吐き、彼等を矚目せしめた記憶は大東亞戦争の進展と共によみがへり、今や強大精銳を誇る日本軍が南洋において瞬く間に米英蘭の聯合軍を撃摧し、ビルマにおいても英軍を驅逐して、早くも獨立を實現させた状態を身近に見ては、印度人も流石に羨望の瞳を輝かさずにはゐられない氣運となつた。

歴史は常に非常の際、非常の人物の出現によつて回轉されることを我々に示してゐる。必ずし

も國民の個々が完全に眼ざめ立上ることを必要としない。指導者たる非常な人物の指揮に従ひ、足並を描へればよいのである。往年レーニンがロシアに革命の狼火を擧げた際は、農奴解放の直後にあたり、國民の大多数は無智の集團に過ぎなかつた。レーニンは眼ざめた少數のボルシェヴィストを提げて立ち、大衆に號令して遂に今日のソ聯を大成する基礎を打建てたのである。印度は人口三億八千萬、その大多數の無智蒙昧なことは、革命當時のロシアに比して甲乙がなけれども、獨立運動はすでに永年くりかへされて、心の準備はできてゐる筈であり、今は非常の時に際し非常の人物の出現を待つのみである。この時にあたり忽然として彼等の前に現はれ、大聲叱咤してその奮起を促し、武力倒英を絶叫したのはシュバス・チャンドラ・ボースである。起てよ印度！ 私はこの一語を以て黎明の印度に瞻し、彼等が積年の熱望であり祈願であつた完全獨立の達成を祈りたい。

著者 ビルマ生活三十八年、多年に亘つてビルマ事情について研究す。現在ビルマ協會理事たり。ビルマ讀本、その他の著書あり。

昭和十九年四月五日印刷
昭和十九年四月十日發行（三〇〇〇部）

ビルマの生活

定價 二圓
特別行爲税相當額十三錢 賣價二圓十三錢

著者

山田秀藏

發行者

東京都日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル内
寶雲會代表者
小池又一郎

印刷者

東京都麴町區麴町二丁目六番地
大西林五郎

印刷所

東京都麴町區麴町二丁目六番地
新聞通信社

配給元

東京都神田區淡路町二丁目九番地
日本出版配給株式會社

發行所

株式會社 寶雲會
東京都日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル内
振替東京二六七三二番
電話日本橋一九二六番

(出版會承認い 350032)

(出版會員番號 130502)

(和田製本)



992
5



賣價(税込) ¥ 2.13